

寒川町立寒川中学校

研究テーマ：自分大好き 友だち大好き 学校大好き 生きるって素晴らしい！
～チーム寒中、ともに学び合い高め合う自己達成感～

1 実践の目的

本校では、昨年度より生徒の「自己肯定感」を高めることを主題として研究に取り組んでいる。自己肯定感とは、否定的な部分も含めたありのままの自分を受容しようとする感覚であり、学校生活における様々な体験を通じて生徒の自己肯定感が高くなったり低くなったりする。

昨年度は、生徒の自己肯定感を高めるための手立てとして教科授業における「形成的評価」の手法について研究を行った。講演会を通じて生徒の自己肯定感を高めるための肯定的フィードバックの手法について学び、授業実践に取り組むことができた。一方で、主題とした「自己肯定感」の概念が広すぎるため、焦点化が課題として挙げられた。

このような経緯をふまえ、今年度は「自己達成感」を研究テーマとして設定した。自己達成感とは、学習活動を通じて「自分なりにできるようになった」という感覚であり、これを高めるために教科授業における「グループ活動」の充実化を研究の柱とした。協働的な学習における他者との関わり合いを通じて、生き生きと活力に満ちた集団となり、生徒個人の自己達成感が高められることを研究仮説として設定し、その検証を研究の目的とした。

また、生徒向けのアンケート結果として、①「自分には良いところがあると思う」、②「先生は、あなたの良いところを認めてくれている」の項目について、ともに昨年度よ

りも肯定的な回答が増しており、本校の研究が生徒に好影響を及ぼしていることが確認できた。

2 実践の内容

(1) 校内研究講演会

「生徒の自己達成感を高める指導の手立て」横浜国立大学大学院教育学研究科の渡部匡隆教授を招聘し、8月28日に講演会を実施した。以下に講演会の概要を示す。

自己達成感に影響を与える心理的要因として「有能感」や「自己効力感」があり、自己達成感の高まりを分析するためには、「応用行動分析」が有効である。応用行動分析については生徒の状況を以下のA～Cに分け、それぞれの段階におけるアプローチを講じるものである。

A	行動する「前」の状況
B	行動「中」の状況
C	行動の「直後」の状況

AからBの状況においては、生徒にとって「頑張ろう、やってみよう、できるかも」と感じることでできる仕掛けを行うこと、BからCの状況においては、生徒にとって「うれしい、楽しい、できた、がんばった」と感じることでできる仕掛けを行うことが、生徒の自己達成感を高める上で有効となる。

教科指導における具体的な手立てとしては、生徒一人一人が自分の考えや能力を表現できる機会、活動、方法の提供、話し合いマニュアルによる話し合い活動の実施、教

科横断的な指導を可能にするための指導案等の共有、などがある。

協働的な学習におけるグループ活動の工夫については、個人の役割分担やポジティブな目標設定、グループを改善するための振り返りの実施等が挙げられ、活発なグループ活動が展開できるようになり、自己達成感の高まりが期待された。



(2) 校内研究全体会

「研究授業、研究協議、指導・講評」

1学年の社会科、2学年の数学科、3学年の国語科、特別支援学級の学活において、自己達成感を高めるために、グループ活動を工夫した提案授業を行った。

第1学年の社会科では、「縄文時代と弥生時代にタイムスリップするならどちらがよいか」というテーマでグループ討議を行った。第2学年の数学科では、平行線を利用した角度の求め方について、グループでさまざまな手法を考える活動を行った。第3学年の国語科では、「百人一首」を3人グループのチーム対抗戦形式で行い、チームで戦略を立てながら多くの札を取ることができるよう工夫して取り組んだ。支援学級の特別活動では、12月の「3校交流会」に向けて、友だちをつくるためにどのような行動が必要かについて4人グループで考え、意見をまとめる活動を行った。

学年ごとに研究協議を行い、その後の全体会にて共有を行った。第1学年では、リーダー層と中間層を高めるために、話し合い

の題材をどのように提示するかが重要であることが示された。第2学年では、学習が苦手な生徒の考えを拾いながらグループで検討することの重要性が示された。第3学年では、グループ活動後に個人にフィードバックを行うことの重要性が示された。支援学級では、グループ活動の役割分担を明確にすることにより、活動に対する役割意識が高められることが示された。

3 実践の成果と課題

今年度は、学年職員を研究グループとして校内研究の推進に取り組んだ。生徒の状況をよく知る職員集団で研究に取り組むことにより、生徒の状況をよく分析しながら授業の手立てについて考えることができた。研究を通して、他者との協働を通じて自己達成感を高めるためには、他者の考えに触れながら自分の考えを深めていく過程が重要であることがわかってきた。そして、見方や考え方を変えることで新たな気づきを得られるという実感を生徒が体験することも有効だとわかった。また、学習が苦手な生徒も、役割を担って活動に参加することで、授業に全く関与しないという状況を防ぐことができ、肯定感の低下を緩和できることもわかった。以上のことから、生徒の自己達成感を高める上でグループ活動の手立てを工夫することは極めて有効であると見出せたことが、今年度の研究の成果である。

4 今後の展開

次年度以降の課題として、生徒の自己達成感を高めるための手立てについての実践を蓄積すること、実践を蓄積する中で有効となる手立てを精緻化していくことが挙げられる。次年度以降も継続的に取り組んでいきたい。